

# 北原白秋詩初出年表

松 村 緑

年まで)があつて、それぞれ研究者の役に立つてゐるが、白秋詩についてはまだこの種のものが作られてゐないやうである。

この年表は作家作品研究「白秋と露風」の授業のために準備したもので、およその見当はつきながら、実物に当ることができなかったために、わざと記載しなかつたものもいくつかある。

多くの方から教示を得て、完全なものに仕上げるためには、未定稿でも一応発表した方がよいし、これだけでもかなり研究者に役立つ筈であると思つて、ここに載せることにした。

この年表は白秋が短歌の他には本格の詩作を停止して、盛んに童謡、民謡、歌謡などを作るやうになるまで、即ち大正四年までの部分であるが、白秋の詩業中注目すべき作品はほとんどこの時期に作られてゐることがわかる。

詩はその形が小さいだけに、単行詩集に収録するに当つて、本文の改訂の行はれることが、小説などとは格段に多いものである。そこで詩の研究者は本文の異同をたしかめるために、どうしても定期刊行物などに発表せられた初出本文を探索することが必要となる。ところがある詩人のある作品の初出刊行物を求めるのは容易な仕事ではない。幸に島崎藤村には『藤村全詩集』巻末の「作品表」、薄田泣堇には筆者の「薄田泣堇作詩年表」(『解釈』第三卷第八・九・一〇号、昭和32年8—10月)「同補遺」(『解釈』第十卷第十号、昭和39年10月)、蒲原有明には矢野峰人博士の『蒲原有明研究』所収の「蒲原有明著作年表」、三木露風には安部宙之介氏の『三木露風研究』所収の「露風作品発表目録」(大正六

明治三十六年（一九〇三）

十二月

文庫 第二十四卷第六号

恋の絵ぶみ

△註Ⅴ『文庫』に載つた最初の詩作品。

明治三十七年（一九〇四）

二月

文庫 第二十五卷第三号（二月一日号）

春湯雑詩（戸下・長陽村・花盗人・病後）

文庫 第二十五卷第四号（二月十五日号）

続春湯雑詩

四月

文庫 第二十五卷第六号

林下の黙想

△註Ⅴ後記に「亡友中島鎮絵君の墓前に献ず」とある。以上署名は北原薄愁。

名は北原薄愁。

十月

文庫 第二十七卷第二号

鳴石笑木（無縁茶釜・模倣猿・異国の春・鶏鳴君）

△註Ⅴ「もとの薄愁がうたへる」と付記、署名は北原射水。

十一月

文庫 第二十七卷第三号

きのこ草紙（猫の眼・武者修行・木乃伊・御注進・月の戸・桃

・古河童）

明治三十八年（一九〇五）

一月

文庫 第二十七卷第六号・早稻田学報第百十二号

全都覚醒賦

二月

文庫 第二十八卷第三号

桃さく道

三月

文庫 第二十八卷第四号

春海夢路

△註Ⅴ以下署名北原白秋。

四月

文庫 第二十八卷第五号（四月一日号）

郊外（その一）

文庫 第二十八卷第六号（四月十五日号）

絵草紙店

七月

文庫 第二十九卷第三号

山蛭

明治三十九年（一九〇六）

一月

文庫 第三十卷第五号

短篇三章（道化役者・漂浪人・一瞬）

四月

明星 午歳第四号

花ちる日

△註V『明星』へのデビュー、「花ちる日」は課題の競作で、

他に石川啄木・内海信之（以上第四号）茅野蕭々・平野万里

・与謝野寛（以上第五号）の作品が見える。

五月

明星 午歳第五号

はなたちばな（紅き実・車上・身熱・梨・青き甕・赤足袋・恐

怖・朝・鶏頭・無花果の園）

六月

明星 午歳第六号

ふるさと（柑子・霊場詣・鉦・よひやみ・南国）

七月

明星 午歳第七号

文月集（恋びと・晩秋・紅火・木の花―『思ひ出』で「椎の花」と改題）

八月

明星 午歳第八号

心の芽（解纜・一瞥・暮愁・郊外・我）

九月

明星 午歳第九号

命（ひらめき・大寺・吐血・赤熱―『邪宗門』で「砂道」と改題・微笑・立秋・玻璃罎・ためいき・凋落・時鐘）

十月

明星 午歳第十号

嗟歎（長月の一夜・旅情・落雷・地獄極楽・正午―『邪宗門』で「日ざかり」と改題）

明治四十年（一九〇七）

一月

明星 未歳第一号

灰色の壁・暗愁・そぞろありき・はばたき

三月

明星 未歳第三号

水之華（青き花・君・朝・桑名・紅玉・海辺の墓・渚の薔薇・  
紐）

△註Ⅴ（伊勢紀伊の旅にて作れる其一）と註記あり。

四月

明星 未歳第四号

焰の琴（蟻・十呂盤・熊野の鳥・屋・珊瑚切・夕）

△註Ⅴ「熊野の鳥」に（以下四篇紀伊熊野の旅にて作れる）と  
註記あり。

七月

明星 未歳第七号

恋慕ながし・燕・軟風

八月

明星 未歳第八号

内陣・かうほね

九月

中央公論 第二十二年第九号

日の翼

十月

明星 未歳第十号

彗星（鉛の室・鋪石・煙草・青き酒・あかき木の実・空蟻・蹠  
・炎上・たはれ女・晩夏）

十一月

明星 未歳第十一号

天艸島（角を吹け・ほのかなる蠟の火に・罎を抜けよ・汝にさ  
さぐ・ただ秘めよ・さならずば・嗅煙艸・乱れ織・鵠・顛末・  
乳―『邪宗門』で「日ごと」に・一炷・高機・若し・驢馬の列）

十二月

明星 未歳第十二号

消えゆく光

明治四十一年（一九〇八）

一月

明星 申歳第一号

耽溺・地平・森の奥

△註Ⅴ一月十三日、太田正雄、長田秀雄、吉井勇らと新詩社脱  
退を与謝野寛に宣言。

新思潮 △第一次Ⅴ 第四号

謀叛

中央公論 第二十二年第一号

慵き島

趣味 第三卷第一号

飢渴

詩人 第八号

急瀬

二月

中央公論 第二十三年第二号

悩の龜

趣味 第三卷第二号

底なる心・君は切る―『邪宗門』で「硝子切る人」と改題

三月

新思潮 第六号

こほろぎ

趣味 第三卷第三号

縦のふたもと

新声 第十八編第四号

悪の窓(その一、狂念・その二、疲れ・その三、悪のそびら・

その四、負傷・その五、象・その六、うめき)

詩人 第九号

ほのかにひとつ

四月

中央公論 第二十三年第四号

楽声(序楽・黒船・月の出・といき)

五月

趣味 第三卷第五号

顔の印象(A精舎・B狂へる街・C醋の甕・D沈丁花―以上四篇、顔の印象八篇のうち)・静かな水―波斯古詩より

七月

中央公論 第二十三年第七号

幽潭外拾篇(幽潭・円燈・接吻の時・尋めゆくあゆみ・蛸・赤子・夏の夜の舟・幽閉・髑髏は熟視む・我子の声・狂へる椿)

八月

中央公論 第二十三年第八号

新詩五篇(夢の奥・盲ひし沼・声なき国・眠ふたげば・鑲工)文章世界 第三卷第十号

納曾利

新声 第十九編第二号

樟の合奏

九月

中央公論 第二十三年第九号

新詩六篇(邪宗門秘曲・魔国のたそがれ・濁江の空・蜜の室・

下枝のゆらぎ・吊橋のにはひ)

文庫 第三十七卷第五号

入日の壁

新声 第十九編第三号

『思ひ出』二十五篇(水ヒアシンス・星・夢・明日・男の顔・

天童・鷺鳥と桃・今日よりは・あかき林檎・天竺・海・夜・七

つの駒・源平将基・旅役者・たそがれどき・泉の子・山・囚人

・挨拶・牛のにはひ・胡瓜・人生・夜学・乳母の墓)

十月

新声 第十九編第四号

邪宗の詩八篇(大曲『悶絶』・大太鼓の印象・二つの世界・鈴

の音・浴室・青き光・暮れなやむ心のあそび・天幕の中)

十一月

明星 満百号記念終刊号

濃霧

文庫 第三十八卷第二号

濁江

△註V『邪宗門』の「濁江の空」とは別作の逸詩である。

明治四十二年(一九〇九)

一月

スバル(昂) 第一号

邪宗門新派体(天鵝絨のにはひ・赤き僧正・赤き花の魔睡・秋  
のをはり・『十月』の顔・秋の瞳・麦の香)

二月

スバル 第二号

鷺の歌

中央公論 第二十四年第二号

狂人の音楽

方寸 第三卷第二号

Sinzō no Nigeyuku Koe・Sake to Tabaco ni・Sora ni

Makka na

三月

スバル 第三号

公園の薄暮・WHISKY

趣味 第四卷第三号

室内庭園・曇日

△註V三月十五日、第一詩集『邪宗門』刊行。

四月

スバル 第四号

夜の官能

五月

スバル 第五号

悪のにはひ

七月

趣味 第五卷第七号

食後

九月

方寸 第三卷第七号

銀笛

十月

屋上庭園 第一号

雑艸園・東京景物詩(瞰望・露台)

十一月

方寸 第三卷第八号

浅草哀歌(I・II・III・IV―『思ひ出』で「焼栗のにはひ」と

改題・V)

明治四十三年(一九一〇)

二月

方寸 第四卷第二号

葱の畑

屋上庭園 第二号

おかる勘平

三月

スバル 第二年第三号

『心とその周囲』六篇(I小さなる領内の平和・II午後の郷愁

・III S組合の白痴・IV泣きごゑ・V銀色の背景・VI神経の凝視)

趣味 第五卷第三号

骨なし兎と黒猫

創作 第一卷第一号

山葵色の薄暮

女子文壇 第六年

木瓜の花と棄子

四月

スバル 第二年第四号

物理学校裏・片恋

創作 第一卷第二号

ピアホールの焼あと

六月

創作 第一卷第四号

岬

文章世界 第五卷第八号

夏の市街（新聞紙・銀座花壇・六月・五月）

秀才文壇

青い髭

七月

スバル 第二年第七号

畜生・解雪・隣人・心中

趣味 第五卷第七号

食後

早稲田文学 第五十六号

霖雨季のゆめ

八月

スバル 第二年第八号

詩二篇（鬼百合・金の入日に繻子の黒）

文章世界 第五卷第十号

石竹のおもひで

三田文学 第一卷第四号

雪の日・春の鳥・水盤・雨あがり

秀才文壇

雨のあとさき

読売新聞 八月二十一日

Chonkina

九月

スバル 第二年第九号

静物・八月のあひびき

創作 第一卷第七号

幼年の日（糸ぐるま・にくしみ・赤き椿・水面・午後・内気）

十月

創作 第一卷第八号

『思ひ出』序詩

読売新聞 十月九日

尿する和蘭人

方寸 第四卷第七号

酒の嚮

十一月

スバル 第二年第十一号

『思ひ出』三章（骨牌の女王の手にもてる花・願人坊・どんぐり）

十二月

スバル 第二年第十二号



思ひ出(泪美藍・青い鳥・AIYANの歌・苧麦のにはひ)

明治四十四年(一九一三)

二月

スバル 第三年第二号

青い小鳥・小児と娘・足くび

創作 第二年第二号

過ぎし日(水中のおどり・隣の屋根・朱欒のかげ・見果てぬ夢

・幻燈のにはひ)

新潮

夜・函

文章世界 第六卷第三号

童謡

三月

白樺 第二卷第三号

人形づくり

創作 第二年第三号

感覚・昼のゆめ

方寸 第五卷第二号

南国小品(夕日・二人)

五月

スバル 第三年第五号

柳河時花歌(道ゆき・かきつばた・紺屋のおろく・NOSKAI・

牡丹・旅役者)

田舎芝居(梅雨の晴れ間・葎の葉)

創作 第二年第五号

時は逝く・気まぐれ・あひびき・水門の水は

三田文学 第二卷第六号

柳の佐和利・カステラ・女

△註V六月五日、第二詩集『思ひ出』刊行。

七月

白樺 第二卷第七号

花火

九月

読売新聞 九月二十四日

とんぼがへり

十月

白樺 第二卷第十号

道化もの

スバル 第三年第十号

秋

十一月

朱欒 第一卷第一号

蝮捕り・涙・河豚・あらせいとう

十二月

朱欒 第一卷第二号

忠弥外七篇（忠弥・女に―『東京景物詩其他』で「もしやさうでは」と改題・彼岸花・神経・片足・墓・庭園の雨・初冬のわかれ）

小歌二篇（春を待つ間に・屋根の風見）

禿

△註Ⅴ「忠弥」の終に註して「『忠弥』は／芝居では雨なのです。

／わたくしは、／雪にしました。／雨だとしたら／水面が、

／びよんぴよんと／はねるでせう。／雪でなければ困るので

す。」という。

明治四十五年（一九二二）

一月

朱欒 第二卷第一号

思ひ出の時・銀座の雨

スバル 第四年第一号

蔵

読売新聞 一月十四日

雪

二月

朱欒 第二卷第二号

歌うたひ

三月

朱欒 第二卷第三号

キャベツ畑の雨

四月

朱欒 第二卷第四号

槍持

六月

朱欒 第二卷第六号（勿忘草）

白い月・黄色い春・芥子の葉・汽車はゆくゆく・梨の畑・そなた待つ間・薄荷酒・悲みの奥・あそびめ・小歌・石竹・河岸の雨・雪・ペンギン・風見―『雪と花火』で「屋根の風見」と改題・外光

△註Ⅴ全卷三木露風とふたりの作品特輯号、白秋はこの他短歌十九首を載せ、露風は詩四篇（現身・月・梅檀・恋の囀り）と書東を寄せている。

大正元年（一九一三）

八月

朱欒 第二卷第八号

訳詩 種子（ラムボオ）

十月

白樺 第三卷第十号

棗の樹

十一月

朱欒 第二卷第十一号

真昼・真黄色・鉄琴

十二月

朱欒 第二卷第十二号

囚人馬車の小父さん

大正二年（一九一三）

四月

朱欒 第三卷第四号

人食ふひと・野晒

九月

△註Ⅴ七月一日、第三詩集『東京景物詩其他』刊行。

スバル 第五年第九号

真珠抄

△註Ⅴ（八月十九日の朝より夜にかけて作る）

と註記あり。

白樺 第四卷第九号

崖の上の麦畠

△註Ⅴ（三崎にて）と註記あり。

処女（女子文壇改題）

城が島の娘

十一月

文章世界 第八卷第十三号

崖の下の蚕豆畑

処女

草の葉っぱ

十二月

スバル 第五年第十二号

闇の夜の粟畑

我等 第一年第一号

丘の三角畑

△註Ⅴ『我等』は『スバル』廃刊の後をうけて創刊した雑誌。

裏表紙には大正三年一月一日日発行とあるが、奥付の大正三

年十二月二十六日発行に従つておく。

大正三年（一九一四）

一月

文章世界 第九卷第一号

城が島の落日

△註Ⅴその後の『文章世界』には「水辺午後」（第九卷第七号）、

「見桃寺抄」（同第八号）等、短歌ばかりを発表してゐる。

九月一日『真珠抄』刊行。

十二月十八日『白金之独楽』刊行。

九月

地上巡礼 創刊号

寸金・白金独語

十一月

地上巡礼 第一卷第三号

掌・消防整列・白金の独楽

大正四年（一九一五）

三月

地上巡礼 第二卷第二号

麗空・牡丹の花を食ふ親爺・河童

マンダラ（マンダラ詩社第一詩集）

波・海雀・海景・馬・崖・雨中小景・城ヶ島の雨  
△註Ⅴ「城ヶ島の雨」には「船うた」と付記。

（本学教授）